

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
第2号(2015度) 2016年3月発行

大学生のインターンシップ参加が社会人基礎力に及ぼす 効果に関する研究

津田将行 前田吉広

大学生の短期インターンシップ参加が社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究

津田 将行* 前田 吉広**

The Effects of Short-Term Internship Participation on Basic Social Skills of University Students

Masayuki TSUDA* Yoshihiro MAEDA**

ABSTRACT

In the present study, we will show the effects of internship. This research centers around independent internship program called "Bingo Open internship" at Fukuyama University, Which was done with the cooperation of companies and the government in Bingo area. This study focuses around students who participated in the internship, using pre-participation and post-participation analysis of diagnostic results from "The Basic Skills Measurement of Productive Members of Society" compares the degree of growth of the students. The results show students capacity was improved in all areas of basic social skills through internship participation. In particular, "initiative" and "creativity" were improved.

キーワード：インターンシップ、事前研修、事後研修、社会人基礎力

1. はじめに

インターンシップは、全国の大学において積極的に推進されており、「平成 24 年度、平成 25 年度大学等におけるインターンシップの実施状況に関する調査」(日本学生支援機構、2015)¹⁾によれば、インターンシップを単位認定科目として実施している大学は、平成 25 年度には 70.7%に上っている。各大学におけるインターンシップの内容や実施方法は多種多様であり、インターンシップの充実・深化により様々な形態が展開されている。

またインターンシップに関する成果や効果に関する研究も多く報告されている。例えば、インターンシップ経験と自己効力感の影響に関する研究、インターンシップ経験と就職活動の関係性に関する研究、長期インターンシップの効果に関する研究などがある。

インターンシップの意義を「社会人基礎力」の観点から分析した研究として、真鍋 ²⁾は、インターンシップ体験による社会人基礎力の伸長と、それが就職活動に与えた影響について分析を行っており、インターンシップ体験ではインターンシップの形態を、短期就業体験型の「日常業務型」と長期課題設定型の「課題設定型」に分けて分析した結果、双方で「社会人基礎力」の伸長があり、特に「課題設定型」について、主体性、実行力、課題発見力、発信力が有意に伸長することを明らかにした。

森ら ³⁾は、高校生のインターンシップでは、「社会人基礎力」の中の「チームで働く力」が向上にしていることを明らかにしている。

*大学教育センター講師 **大学教育センター助教

また山野ら⁴⁾は、インターンシップの効果として、企業や仕事に対する理解の深化、専門領域についての実務能力の向上、職業生活に対する適応力の向上、社会で必要とされていることへの気づきの獲得、さらに大学で何を学ぶべきといった将来のビジョンが明確になることを指摘している。また事前学習において、「社会人基礎力」の説明の重要性を指摘し、インターンシップの効果を実務能力の向上や職業生活に対する適応力の向上だけに限定せず、大学における学習意欲の向上や責任感、協調性、自立性等を養い、人間的な成長に求めていることでも注目に値するとしている。

松尾⁵⁾は、インターンシップの事前教育、現場研修および事後教育の一連の連続した教育プログラムにおいて、「社会人基礎力」を結節点とすることで、効果的に成長を得ることができることを明らかにしている。

本研究では、本学のインターンシップに参加した学生を対象として、インターンシップの参加前後において、「社会人基礎力」の診断を行い、その結果を用いて、学生の意識の変化や成長度合いを定性的・定量的に比較し、今後のインターンシップのさらなる発展に寄与するための、プログラム改善や展開を検討する。また「社会人基礎力」の診断結果は、個々の学生を客観的かつ定量的に把握するには適しているが、全体像を把握し分析するには難しいことから、ここでは主成分分析よりインターンシップ後の学年の相違や男女の相違の特性について明らかにする。

2. 福山大学におけるインターンシップの取り組みについて

(1) インターンシップの意義と目的

福山大学では、キャリア教育の一環として、自己理解や社会に対する理解を深め、社会における自己実現を模索するとともに、職業観を養い、専門職業人への志向形成のために、強力にインターンシップを推奨している。

本学のある広島県福山市やその周辺都市圏である備後圏域は、製造業を中心に「オンリー・ワン」を標榜する企業が多く存在する地域であり、本学では、備後圏域の中心とした企業や官公庁の協力のもと独自のインターンシップ「BINGO OPEN インターンシップ」を実施している。

(2) インターンシップのスケジュール

表-1に本学のインターンシップの実習スケジュール内容を示す。

平成27年度の場合、4月上旬に全学部学科の3年次生と2年次生を対象として、インターンシップ説明会を実施した。実施内容は、学生のインターンシップへの理解を深めるために、インターンシップの内容や実施方法についての説明である。

5月下旬に各社からのインターンシップ募集要項を学生に公開した。

6月上旬にインターンシップ合同企業説明会を実施した。同説明会には、企業29社が参加、学生は330名が参加し、各企業担当者から直接、インターンシップの実習内容について説明を受けることができる。よって企業担当者と学生が直接コミュニケーションを行うことで、お互いの思いや考えについて理解を深めることができ、自分の関心にあった実習先の選定を行うことができる。

6月末をインターンシップの受け付けの締め切りとした。それまでに学生はインターンシップを希望する企業を決め、履歴書を提出する。その後、履歴書はインターンシップ希望する企業へ郵送し、

表-1 本学のインターンシップの実習内容

日付	実施内容
4月上旬	インターンシップ説明会
5月下旬	インターン募集要項の公開
6月上旬	インターンシップ企業説明会
7月中旬	インターンシップ実習先の決定
8月上旬	事前研修
8月中旬～9月中旬	インターンシップ実習
9月下旬	事後研修
10月上旬	学内発表会
11月下旬	学外発表会

選考を受け、7月中旬までにインターンシップの実習先が決まる。

8月上旬にインターンシップ直前の事前研修を実施した。研修内容は、社会人としてのマナーや心構えなどについて、アクティブ・ラーニング形式の学びとした。また参加学生には、後掲表-2に示す「社会人基礎力」の12つの能力要素の内容と意義を説明し、インターンシップを通じてどのような力を身につけたいかを、「社会人基礎力」の12つの能力要素と照らし合わせて、成長目標を設定させた。

8月中旬から9月中旬までの夏季休暇に3日間から14日間の予定でそれぞれインターンシップに参加した。インターンシップ期間中、学生は、毎日、事前研修時に設定した成長目標についての振り返りを行うとともに、体験内容についての報告書を作成した。またインターンシップ受け入れの企業には、インターンシップ後に、学生に対する講評の提出を依頼し、それを学生にフィードバックし、学生の自己理解を促すことを企図した。

9月下旬にインターンシップ後の事後研修を行った。インターンシップの振り返りによる学びの深化、体験紹介を通じた学びの共有、そして他の学生の学びを知ることで、自身の体験との比較や見つめる視点を増やし発見するなど、自己の成長につながる振り返りを行った。

10月上旬に、1年次生や2年次生が多く受講している複数の学部・学科のキャリアデザインの講義で、インターンシップの体験内容や学んだことについての発表を行った。発表はプレゼンテーション形式で一人ずつ行い、不参加の学生も含め、それぞれの体験の共有化を行った。

11月下旬に、「OPEN PRESENTATION」と題する本学のインターンシップの集大成の場である学外発表会を開催し、学内選考で選ばれた11社15名の学生がインターンシップ経験を学外向けに報告を行った。受け入れ企業の担当者からも各発表者のインターンシップ状況についての講評が行われた。当日は本学の学生以外にも地元の産業界からの多くの方の参加があった。

3. 社会人基礎力とは

経済産業省が2006年に「社会人基礎力に関する研究会」において、「社会人基礎力」とは、「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義している。

この「社会人基礎力」は、表-2に示すように、3つの能力と12能力要素から構成されている概念である。第一の能力は「前に踏み出す力(アクション)」(一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力)であり、主体性、働きかける力、実行力の3つの能力要素から構成されている。第二の能力は「考え抜く力(シンキング)」(疑問を持ち、考え抜く力)であり、課題発見力、計画力、創造力の3つの能力要素から構成されている。第三の能力は「チームで働く力(チームワーク)」(多様な人とともに、目標に向けて協力する力)であり、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の6つの能力要素から構成されている。これら

表-2 社会人基礎力の能力要素(経済産業省、2006)

分類	能力要素	定義
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかける力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームワークで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

の能力は「基礎学力」、「専門知識」をうまく活用していくために必要不可欠な能力であるとされ、これらを測定することで、社会に出ることに対して必要な能力の獲得の状況を複合的に判断できる。

4. 調査方法

本研究の調査は、インターンシップに参加する前後である、事前研修時の8月上旬と、事後研修時の9月下旬に実施した。

調査対象は、2014年のインターンシップに参加した2年次生、3年次生の学生であり、事前研修と、事後研修の両方においてアンケートに回答した学生である。ただし、未回答項目を含むものや、どちらか一方のみの回答者は省いた。よって有効回答者は37名である。アンケート項目は社会人基礎力に関する75つの質問項目から構成されており、それぞれ四段階評定尺度法での回答とした。アンケート項目はそれぞれ同じものを使用した。アンケートの調査は株式会社トラストコーペレーションに依頼した。

5. 解析結果と考察

図-1に事前研修と事後研修の社会人基礎力の各能力要素別の平均診断結果を示す。事前研修と事後研修を比較すると、12つのすべての能力要素のポイントが増加しており、インターンシップ参加により各能力要素が伸長していることがわかる。松尾⁵⁾は、インターンシップの事前教育、現場研修および事後教育の一連の連続した教育プログラムにおいて、「社会人基礎力」を意識させることで、効果的に成長を得ることができること示唆しており、本学のインターンシッププログラムにおいても、事前研修での成長目標設定による意識づけや、インターンシップ期間中に日々の成長目標設定についての振り返りを行うことで「社会人基礎力」の12つの能力要素が伸長していることがわかる。

12つの能力要素のうち、特に「主体性」と「創造力」が7ポイント増と大きく伸長している。「主体性」は、意欲や自信を支える自尊感情の部分を含み、自律性から積極性、さらに自己理解・管理・評価能力までカバーする力(経済産業省、2010: pp.40-41)⁶⁾であり、インターンシップにおいて、社員からの支持を待つだけではなく、自ら何らかし目標を達成しようとして行動し体験をすることによって、「自らの行動は自分で考えて行う」、「自分でしたこと責任を自分で取れる」という感情が生まれ、「主体性」の能力が伸長したものと考えられる。

また「創造力」は、問題解決過程に

において「課題発見力」とともに必要となる力であり、既存の知識や考え方の組み換えなどの試行錯誤の時に発揮される力である(経済産業省、2010: pp.49-50)⁶⁾。インターンシップ中において動作や作業に対して、指示されたことだけでなく、その一歩先の事柄や方法について考えることによって、結果的に「創造力」の伸長に反映したものと考えられる。

次に、インターンシップ後の事後研修における社会人基礎力診断結果に対して、多変量データから共通な要素を探し出し、新たな総合指標を作り、その特性を調べる手法である主成分分析法を用いて考察を行う。

分析の結果、累積寄与率は、第2主成分までが70.5%であることから、第2主成分までを使用することにした。

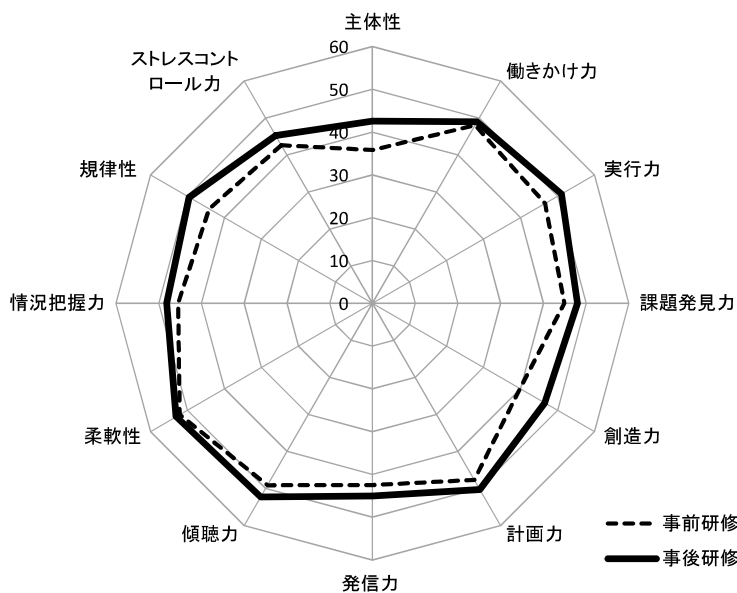


図-1 事前研修と事後研修の社会人基礎力の平均診断結果

図-2 に各要素の主成分分析結果を示す。第 1 主成分は、すべての能力要素のウェイトがプラスであることから、「総合的な社会人基礎力」と定義することができる。第 1 主成分のウェイトが大きいのは、「実行力」や「課題発見力」であることから、「前に踏み出す力」や「考え抜く力」である個人能力の要素である。逆にウェイトが小さいのは「ストレスコントロール力」、「規律性」および「傾聴力」であることから、「チームで働く力」である対人能力の要素である。よって、インターンシップに参加することにより、現実の社会に対する想像レベルから、不安や多くの疑問点が軽減し、実務を理解することや自分の可能性を見つけることにより、対人能力よりも個人能力が上がり「総合的な社会人基礎力」が向上するものと考えられる。

第 2 主成分について、プラス方向のウェイトが大きいものは、「主体性」、「傾聴力」および「規律性」であり、逆にマイナス方向のウェイトが大きいものは、「計画力」、「課題発見力」および「発信力」である。軸のプラス方向の「主体性」、「傾聴力」および「規律性」は、自己理解や人間関係形成・社会形成能力など関係思考能力に分類できる。一方、マイナス方向の「計画力」、「課題発見力」および「発信力」は、課題対応能力に分類できることから、第 2 主成分の軸は「関係思考能力-課題対応能力」とする。

図-3 に主成分分析結果を示す。ここでは、3 年次生と 2 年次生の学年別と男女別の 4 つのグループに分けてプロットした。その結果、第 1 主成分である「総合的な社会人基礎力」は、男女ともに 2 年次生よりも 3 年次生の方が比較的ポイントが高いことがわかる。また第 2 主成分である「関係思考力-課題対応力」について、関係思考力が高い学生は 3 年次生男性が多く、逆に課題解決力が高い学生も 3 年次生男性が比較的多い。関係思考力が高くなった学生、課題解決力が高くなった学生について、インターンシップ先の企業や実習内容の相違により、伸長する力に違いを示すと推察したが、それぞれの力が伸長した学生は、ともに同じインターンシップ先で同じ実習内容を体験しており、インターンシップ先やプログラム内容よりも、各学生の個々の感じ方によって伸長する力の違いを示したものと思われる。

今後のインターンシップによる学生の意識の変化や成長度合いを高めるには、「社会人基礎力」を意識させる事前研修、インターンシップおよび事後研修の連続した教育プログラムが重要である。つまり事前研修において、「社会人基礎力」の 12 つの能力要素と照らし合わせて、成長目標を設定する時には、第 1 主成分「総合的な社会人基礎力」の結果より、ウェイトが大きい個人能力よりもウェイトが小さい対人能力に対する意識づけを促すことが重要と考える。すなわち、インターンシップにおい

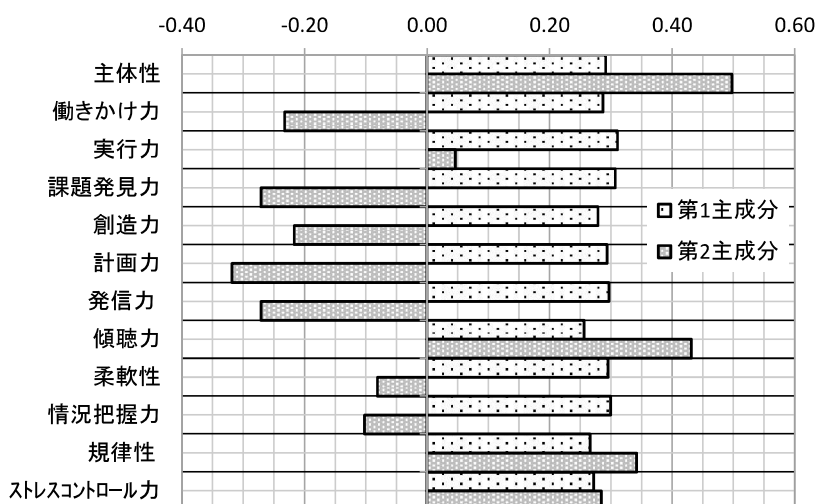


図-2 各要素の主成分分析結果

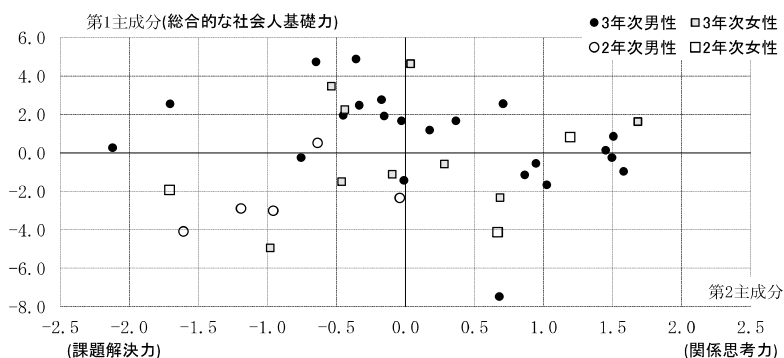


図-3 主成分分析 第 1 主成分と第 2 主成分のプロット

て、意欲的に社会人とのコミュニケーションを図ることで、大きな成長へとつながると考える。そして事後研修においては、インターンシップについて、成長目標の達成について自分の振り返りや他人の経験を元に「社会人基礎力」について再考するとともに、事後研修後の学生生活においても、インターンシップの経験や「社会人基礎力」の各能力要素を日々意識し、行動することが重要と考える。

また、主成分分析結果より、事前研修について、従来どおりインターンシップ参加者全員による他学部他学科、学年横断による事前研修を実施する前に、3年次生と2年次生の学年ごとに授業を行い、特に2年次生に対して、「社会人基礎力」の12つの能力要素について詳しく説明、指導することが各能力要素を伸長させる可能性があると考えられる。

6. まとめ

本研究より得られた知見を以下に示す。

インターンシップ教育プログラムにおいて、インターンシップ前後を比較すると「社会人基礎力」の12つ能力要素と照らし合わせて、成長目標を設定させることによって、12つのすべての能力要素が伸長し、特に「主体性」と「創造力」が伸長していた。また今後の授業改善として、事前研修において「社会人基礎力」の能力要素を基に、個人能力よりも対人能力を意識させた成長目標設定を指導するとともに、インターンシップでは意欲的に社会人との交流を行い、事後研修では成長目標の達成に対する振り返りや、事後研修後においてもインターンシップの経験や「社会人基礎力」の各能力要素を日々意識して、行動するように指導を行うことによって、「社会人基礎力」の能力要素が伸長すると考えられる。

本研究では、有効回答者は37名と少数であり、また学部学科の特性を見出すことができなかった。今回は、より多くの回答者となるように、また業種や職種、またインターンシップの形態別などに焦点を当てた調査・解析を行うとともに、インターンシップへの参加の有無を比較することで成長度合いの把握することが今後の課題である。

参考文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構：平成24年度、平成25年度大学等におけるインターンシップの実施状況に関する調査、2015年3月
- 2) 真鍋和博：インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響、日本インターンシップ学会年報、第13号、pp.9-17、2010
- 3) 森雅人・堀内明：インターンシップによって培われる社会人基礎力のデータ解析(1)高大接続姜郁データベース化に向けた予備的考察、札幌国際大学紀要、第42号、pp.185-193、2011
- 4) 山野明美・平井松午・成行義文：キャリア教育におけるインターンシップ-大人数講義における事前学習の有効性と課題-、大学教育研究ジャーナル、第11号、pp.38-55、2014
- 5) 松尾哲也：インターンシップの意義と「社会人基礎力」、島根県立大学総合政策学会「総合政策論叢」第30号、pp.49-63、2015
- 6) 経済産業省：社会人基礎力育成の手引き-日本の将来を託す若者を育てるために-、学校法人河合塾、2010

謝辞

本研究は、文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の助成を受け実施した。厚く御礼申し上げたい。また執筆するにあたり、自分未来創造室の方々には多くのアドバイスとサポートを受けた。この場をお借りして感謝申し上げたい。